

わが国独自の文学批評のスタイル、「文藝時評」の全容を初めて集大成

●ゆまに書房 創立三〇周年記念出版●

全巻堂々完結

ゆまに
書房 YUMANI
SHOBU

文藝時評大系

中島国彦

(早稲田大学教授)

池内輝雄

(國學院大學大学院客員教授)

曾根博義

(前・日本大学教授)

宗像和重

(早稲田大学教授)

全73巻・別巻5(索引)

〔編者〕

文藝時評とは主として雑誌掲載作品に対する同時代の現場批評である。「文藝時評」という呼称は、明治三十四（一九〇一）年、「太陽」誌上に掲載された大町桂月「文藝時評」を嚆矢とする。さらに「文章世界」の田山花袋「時評」、読売新聞の正宗白鳥「文藝時評」が登場し、以降今日まで新聞・雑誌に連綿と掲載されているわが国固有の文藝批評のスタイルである。

しかし、月々の新聞・雑誌（掲載の作品）に対する批評は、ここに始まったわけではない。明治十年代末にも、名こそ「文藝時評」と冠せずとも、実質的には「文藝時評」といえるものが多く存在した。いわく「近頃の小説」「時評数則」「文藝評論」「文藝時観」「文藝界雑俎」「文藝小観」「彙報」「前月文藝史」「〇月の小説壇」「時文雑観（評論）」「最近の小説壇」「最近の雑誌から」「〇月の重なる雑誌」「最近思潮」「雑録」「甘言苦語」「緩調急調」など、これらのあるものは「文藝時評」そのものであり、あるものは「文藝時評」の部分を含んでいる。

従来読み捨てられ、軽視されがちであった「文藝時評」の原資料を丹念に渉猟し、同時代批評の臨場感と文学史との時差、とりわけ文藝ジャーナリズムの拡大によって、文学がいかなる変容を来してきたかを辿りたいと小社は考えた。

二〇〇一年、日本近代文学研究の第一線の研究者、中島国彦、池内輝雄、曾根博義、宗像和重の四氏に諮り、本企画の準備に入り、明治十九（一八八六）年を起点とし、昭和四十五（一九七〇）年、三島由紀夫の死にいたる八十年余の「文藝時評」の骨格を得ることができた。

二〇〇五年の刊行より、幸いにも読者各位のご支援を得ることができ、幾多の編集上の困難を乗り越え、無事ここに完結を迎えることとなった。

本大系が今後の近代文学研究に大きく寄与することを願ってやまない。

二〇一〇年四月

ゆまに書房

本書の特色

●同時代の小説・文藝評論・戯曲への現場批評である「文藝時評」を初めて集大成する。収録文は明治十年代末より昭和四十五年まで。「文藝時評」は、その時の「文壇」と密接な関係にある。文壇棲息者の生きいきとした注視と活動があつてこそ、初めて同時代の現場批評が成立する。本大系には「文壇」の成立期から「文壇」と「文壇ジャーナリズム」が濃密な関係をもちえた昭和四十五（一九七〇）年までの「時評」を収める。諸機関の協力をいただき、できうるかぎり新聞、雑誌の初出原本を復刻収録する。

●「文藝時評」は、主として小説・文藝評論・戯曲を批評の対象としている。別に詩、短歌、俳句などを対象とした時評があるが、「特殊なスタイル」のものを除き割愛する。（「特殊なスタイル」とは「最近の文学界」などの総題の下に「詩」を含む全ジャンルを評論したものを指す。）

●明治篇、大正篇、昭和篇、全巻にわたって詳細な索引を付す。従来の作家・作品名索引にとどまらず、項目（たとえば「大逆事件」「関東大震災」、文学論争など）からも作品をたどることができるよう工夫した。

別巻の3項目の索引から検索が可能。

見本
本文

75%に縮小してあります。

人名索引

84 索引—人名索引【や】

矢崎輝 5-369b
 矢島進 9-110b
 矢代堅二 10-155b
 矢代静一 10-65b、10-73a、10-76c、10-78c、10-93d、10-102c、13-136a、13-147a、13-164a
 安井謙 7-350d
 安井源治 7-57d、7-184a
 安井曾太郎 7-258c、8-427b
 安岡章太郎 6-319b、6-333a、7-27b、7-28a、7-36b、7-41c、7-42c、7-58c、7-62d、7-64a、7-417c、7-420c、7-425d、7-461b、7-485a、7-503a、7-507c、8-36a、8-37c、8-44b、8-68d、8-76c、8-131c、8-139a、8-186d、8-211b、8-228d、8-268b、8-274a、8-280d、8-282a、8-287a、8-290b、8-313b、8-314a、8-319a、8-336a、8-349c、8-357c、8-371d、8-375b、8-411a、8-422c、8-424a、8-460a、8-468d、8-478a、8-508a、8-512b、8-531b、8-541b、8-553b、8-558c、9-10a、9-21b、9-24c、9-29a、9-31c、9-35c、9-36a、9-39d、9-42c、9-63c、9-75b、9-79c、9-104b、9-107b、9-115a、9-133c、9-149b、9-160b、9-163c、9-185a、9-205c、9-207d、9-209a、9-214a、9-219a、9-227d、9-248a、9-249b、9-257c、9-267d、9-276c、9-291d、9-294c、9-385c、9-389d、9-396c、9-404a、9-427c、9-432c、9-442b、9-456b、9-466b、9-474a、9-479b、9-481a、9-496a、9-506c、9-527a、9-529d、9-555a、10-17d、10-20b、10-40c、10-74c、10-76d、10-79a、10-82c、10-98b、10-100a、10-103c、10-105a、10-158b、10-171b、10-174d、10-198a、10-201c、10-204d、10-253a、10-258b、10-417d、10-506b、11-35d、11-38b、11-42d、11-47b、11-78a、11-116a、11-121b、11-122d、11-128d、11-134b、11-137d、11-141b、11-172d、11-176d、11-178d、11-182a、11-184c、11-189a、11-192d、11-203c、11-220a、11-255b、11-271a、11-274a、11-303d、11-313b、11-318c、11-319b、11-330a、11-345a、11-364b、11-402a、11-408b、11-524a、11-533c、11-574b、12-23b、12-43a、12-49d、12-62a、12-77b、12-83b、12-115c、12-226d、12-257c、12-315c、12-386a、12-470a、12-528b、13-49b、13-97d、13-99c、13-103a、13-107a、13-112c、13-115a、13-120a、13-123b、13-132a、13-320c、13-358b、13-382a、13-404d、13-411a、13-418a、13-422a、13-449a、13-509b、13-518b
 安岡伸好 10-379a、10-421c、10-423b、10-463b、11-176d、11-182b、11-203c、

220 索引—作品索引【む】

麦の黒ん坊(川崎崎二) 8-506a、9-8b、9-14b
 麦笛の歌(片野純忠) 12-79a
 むぎめし学園(鶴岡正男) 8-4b
 無窮一家(金史良) 3-360a
 無頼者(火野葦平) 4-15b
 8-558c、9-7a
 無垢の人(藤島泰輔) 11-227a、11-233b、11-238a、11-241c、11-244c、11-250d、11-272b
 無限後退(小島信夫) 11-390c、11-421a、11-471b
 無間堂主人の失踪(八木義徳) 6-455d
 無限に満たされたい心(本多秋五) 13-161b
 夢幻泡影(外村繁) 4-197b、4-341b、4-351d、5-373b、5-568b、6-4a
 無限抱擁(滝井孝作) 3-36a、4-268a、7-336b
 夢話(森山啓) 12-374b、12-383a、12-387d、12-389d
 向島(永井荷風) 13-528d
 無国籍群(斎木寿夫) 9-175d
 無言(川端康成) 8-177b、8-212a
 無言歌(中村稔) 6-72b
 武蔵野日記(丹羽文雄) 9-482a
 武蔵野夫人(大岡昇平) 5-52b、5-73a、5-103b、5-107a、5-111d、5-137c、5-144b、5-153d、5-186c、5-227a、5-241b、5-243c、5-263a、5-281c、5-325a、5-334a、5-335d、5-340b、5-380a、5-389c、5-397c、5-400b、5-401a、5-439a、5-496b、5-532b、5-564c、5-577d、5-579c、6-53a、6-56a、6-58d、6-80b、6-85c、6-90b、6-166b、6-198d、6-220b、6-239a、6-254c、6-257c、6-259a、6-289c、6-295b、6-352c、6-433b、6-450b、6-484a、7-16a、7-130c、7-169a、7-229d、7-255c、7-266b、8-287b、8-298a、9-162c、11-252a、12-270c、13-374d
 虫(今東光) 12-128a、12-132c、12-134a
 虫(丹羽文雄) 9-383b、9-419a
 蒸し暑い夜の刻印(北原武夫) 4-357a
 虫のいろいろ(尾崎一雄) 3-86b、5-334a、5-373b、7-200b、8-56b、9-56b、9-485b、13-302a
 虫の如く死ぬ(正宗白鳥) 2-146a、2-305c、3-84d、4-152d
 虫の勇氣(真鍋呉夫) 8-225b
 蝕まれた友情(志賀直哉) 2-225b、2-229c、2-279a、2-439c、3-29c、3-362c、5-170c、5-373b、6-449c、10-526c
 むしばめる花(伊藤整) 4-52d、4-90c、8-553c
 虫めづる姫君 1-246b、13-29c
 無邪気な悪魔(きだみのる) 11-390d
 無邪気な人々(椎名麟三) 7-228a、7-229d、

作品名索引

290 索引—事項索引【せ】

11-563c、11-566d、11-569d、12-480b、12-484c、12-491a、12-493d、12-495c、12-499b、12-504a、12-509d、12-512b、12-533a、13-483b、13-493b、13-502a、13-506a
 全国同人雑誌連盟推薦作品(「総合」) 12-176b、12-185b、12-197b、12-265a
 全国文学集団コンクール入選作(「新日本文学」) 10-72b、10-234a、10-257b
 戦後作家 1-159a、3-110d、3-180a、3-188a、3-247a、3-302c、3-307a、3-413a、3-452a、3-461a、3-482a、3-523c、3-529c、3-531d、4-3a、4-11a、4-27b、4-81a、5-293a、5-366b、5-373b、6-332a、7-152a、7-184a、7-441a、7-447d、7-488b、8-28d、8-107b、8-230b、8-291b、9-142d、9-354a、10-541a、11-93c、11-437c、12-158c、12-462a、13-56b、13-354b
 戦後作家特集(「文藝」) 7-477a
 「戦後詩人全集」(書肆ユリイカ) 10-259a
 戦後詩人論(「ユリイカ」) 12-253c
 戦後ジャーナリズム 3-532c、4-254c、4-344a、7-13a
 戦後少女 10-374c
 戦後小説 3-106d、12-315a
 戦後哲学 3-503a
 戦後転向 9-507b、13-214b
 戦後肉体派 5-93d
 戦後日本文壇評判記 7-161d
 戦後派 3-208a、3-285a、3-335b、3-498b、3-501b、3-527c、4-5a、4-23c、4-47c、4-49d、4-95b、4-108b、4-127a、4-150a、4-161d、4-189a、4-201c、4-209a、4-216a、4-285c、4-296b、4-326b、4-341b、4-343a、4-353a、5-10c、5-16a、5-40b、5-148b、5-181c、5-279d、5-352c、5-388b、5-436b、5-507b、5-525b、6-9b、6-77b、6-110a、6-330c、6-363a、6-366a、6-452c、7-98d、7-115c、7-403c、7-447d、7-481a、7-484a、7-486b、7-488b、7-507a、8-3b、8-10a、8-93a、8-141a、8-193a、8-226b、8-268b、8-279a、8-284b、8-298a、9-24d、9-115a、9-300d、9-420a、9-474b、9-477b、9-493b、9-524a、9-525d、9-529c、10-42b、10-71c、10-158b、10-180b、10-204a、10-270c、10-322a、10-339b、10-405c、10-420d、10-443d、10-477d、10-532b、10-547b、11-43b、11-119a、11-122b、11-292a、11-335c、11-400a、11-464b、11-497a、11-515a、12-88d、12-259b、12-307b、12-462a、13-28b、13-96d、13-378b、13-422b、13-452d、13-464a、13-523d
 戦後は終わったか(「群像」) 13-298a、13-322d

事項索引

戦後派作家 3-335c、4-127b、5-241c、5-294b、7-21a、7-7-498a、8-3b、8-187a、8-8-494a、8-555d、9-39d、9-9-404a、9-493c、10-28a、10-259b、10-339b、10-435 10-501b、10-507b、10-528 12-100d、12-385c、12-560 13-217d、13-452d、13-464
 戦後派女性 8-214d
 戦後派青年 5-411c
 戦後派知性小説 8-263a
 戦後派的作品 10-270c
 戦後派の全貌(「文藝」) 7-449b
 戦後派文学 3-335b、4-47d、5-86a、5-294a、5-397b、8 11-292a、11-391c、13-375
 戦後派文士 7-170a
 戦後批評家 3-263c
 戦後風俗 5-373a
 戦後プロレタリア文学 10-447c 1-124a、1-175a、2-115a、2-320d、2-429b、3-6c、3-20b、3-105c、3-1175d、3-178a、3-188a、3-218a、3-236b、3-249c、3-285c、3-305a、3-311a、3-362d、3-372a、3-396b、3-417c、3-442a、3-449a、3-482a、3-501b、3-528b、4-12b、4-27b、4-33b、4-4-4-97a、4-155c、4-199b、4-5-53b、5-86c、5-123b、5-5-204b、5-261a、5-291b、5-480b、5-538a、5-552d、6-53b、6-308a、6-471c、7 8-455a、8-479a、8-561b、10-280b、10-501a、11-154 11-345a、11-361a、11-515 12-322d、12-342c、12-438 13-188d、13-328c、13-374 13-461d
 戦後文学運動 4-10b、4-26b
 戦後文学界 3-363b
 戦後文学者 3-110c、6-53b、6-5-214d、
 戦後文学賞 5-183c、5-241d、
 戦後文学的主题 7-28b
 戦後文学の十年(「文学界」) 10-10-501a
 戦後文学の問題点(「文学評論」) 12-462a、13-28b、13-96d、13-378b、13-422b、13-452d、13-464a、13-523d
 戦後文学論 3-529c、9-301b
 戦後文壇 3-287c、3-523c、

☆別巻索引の特長

●「人名」索引

本巻に掲載された人名を取めた。社会的通称のほか、多くの別号が用いられている場合は、調査の上、社会的通称の下に一括して記載した。(例、石橋忍月←鸚鵡山人、啄木生、気取半之丞、梅檀生、忍月居士、福洲学人ほか〈明治篇〉)

●「作品名」索引

本巻に掲載された作品を作者名とともに取めた。また作品に付記されている執筆者名が無署名、別号の場合も、判別できるものは調査のうえこれを補った。

●「事項」索引

雑誌名、新聞紙名、出版社、文藝用語、社会的事件ほかを取めた。これによって、文藝時評が担った幅広い言説が一瞥のもとに俯瞰できる。本企画の最大の特徴である。

※『文藝時評大系 昭和篇2 別巻(索引)』(昭和21年-33年)による一例。

▼「人名索引」 吉行淳之介 145件、安岡章太郎 192件、庄野潤三 110件、小島信夫 150件、遠藤周作 114件、松本清張 76件、井上靖 273件、石原慎太郎 145件、大江健三郎 115件、開高健 88件。 ▼「作品索引」 「暗い絵」(野間宏) 38件、「武蔵野夫人」(大岡昇平) 60件、「太陽の季節」(石原慎太郎) 67件、「飼育」(大江健三郎) 35件、「樹山節考」(深沢七郎) 56件。 ▼「事項索引」 戦後派 106件、第三の新人 93件、中間小説 185件。

明治篇 (全15巻＋別巻)



▼第1巻 明治19年～明治27年

当世書生氣質の批評 (高田半峯(早苗)、『中央
學術雜誌』明治19年2月/浮雲(二篇)の漫評
(徳富蘇峰)、『国民之友』明治21年2月17日/明
治二十二年の戯曲(森篤次郎)、『しがらみ草紙』
明治23年2月/当世文学の潮模様(批評) (北
村透谷)、『女学雜誌』明治23年1月/今年初半
文学界(小説界の)風潮(坪内逍遙)、『読売新
聞』明治23年8月4日/新年現象、新年雑誌
(彙報) (無署名)、『文学界』明治26年1月/ほか



高田早苗

▼第2巻 明治28年～明治29年

一葉女史(時文) (田岡嶺雲)、『青年文』明治28
年3月/小説界の新傾向(雑報) (無署名)、『帝
国文学』明治28年8月/近作小説一束(雑報)
(無署名)、『帝国文学』明治28年12月/閨秀小説
を讀みて(十二角生)、『文学界』明治29年1
月/青年小説を讀む(雑報) (大町桂月)、『帝国
文学』明治29年3月/三人冗語(幸田露伴・斎

藤緑雨・森鷗外)、『めさまし草』明治29年4
月/新刊批評(評苑) (幸田露伴)、『新小説』明
治29年9月/ほか

▼第3巻 明治30年～明治31年

金色夜叉、つき草(漫評) (平田禿木)、『文学界』
明治30年1月/新小説各評(坪内逍遙・森鷗
外・依田学海・幸田露伴)、『新小説』明治30年
2月/今日の評論(雑録) (上田敏)、『新小説』
明治30年7月/一月の創作界(『文学界』) (緒方
流水)、『世界之日本』明治31年2月/『文界寂
寥』(時文小言) (田岡嶺雲)、『東京独立雑誌』
明治31年6月/文学美術漫評(白雲)、『ホトト
ギス』明治31年10月/ほか



▼第4巻 明治32年～明治33年

明治三十一年の文学界(無署名)、『六合雜誌』
明治32年1月/明治三十一年文藝界概評(小説
界) (無署名)、『帝国文学』明治32年1月/新春
の純文学(時文評論) (後藤宙外)、『新小説』明
治32年2月/二月以来の文学界(無署名)、『六
合雜誌』明治32年4月/文界時評(田山花袋)
『中学世界』明治32年12月/文界時評 評論につ
きて(主張) (浅野馮虚)、『新声』明治33年1
月/笠上笠語(角田浩々歌客)、『小天地』明治
33年10月/ほか

▼第5巻 明治34年

卅三年史の一面 我が文学界の昨年を概評す

(黒田湖山)、『活文壇』1月/批評家の態度(『文
藝時評』) (大町桂月)、『太陽』1月/文藝小観
(林田春潮)、『中央公論』4月/昨今の小説界
〔新刊雜書〕(暮雪楼)、『東京日日新聞』6月6
日/最近の小説(久保天随)、『新文藝』9月/
求むる物を与へよ・最近の反動(時文) (後藤
宙外)、『新小説』10月/歳末の小説界(無署名)
『早稲田学報』12月/ほか

▼第6巻 明治35年

壬寅文壇(文学評論) (千葉掬香)、『読売新聞』
1月13日/昨年の文壇(『文藝雜俎』) (与謝野鉄
幹)、『明星』1月/無題録三十一則(『文藝時評』)
(高山樗牛)、『太陽』2月/四月の小説壇(平尾
不孤)、『文藝界』5月/八月小説界の概評(雑
報) (無署名)、『帝国文学』9月/十一月の小説
『六合雜誌』(A・S・生) 12月/本年の文壇
〔日曜附録〕(中島孤島)、『読売新聞』12月7
日/ほか

▼第7巻 明治36年～明治37年

文藝時評 明治三十六年の文壇を迎へて(『文藝
雜俎』) (大町桂月)、『太陽』明治36年1月/癸卯
文学(秋声の近業) (日曜附録) (中島孤島)
『読売新聞』明治36年2月22日/大絃小絃『文
庫』(電光) 明治36年8月/作家十氏論(月旦)
(扶陵生)、『新声』明治37年1月/近時の文壇
(登張信一郎)、『新小説』明治37年1月/戦後の
文壇(時文) (後藤宙外)、『新小説』明治37年7
月/最近の文壇(『文藝時評』) (片山孤村)、『中央
公論』明治37年11月/ほか

▼第8巻 明治38年

新曲浦島に就ての所感(『文藝時評』) (上田敏)
『中央公論』1月/文界所感(平出修)、『明星』



…… 推薦のことば ……

敬意、困難、楽しみ

紅野敏郎 早稲田大学名誉教授

編年体の「文藝時評」の一大集成とい
い得るこのたびの壮大な企画に敬意
を表し、拍手を送りたい。しかし行方
には猛烈な難所、関所が控えているこ
とも事実である。「文藝時評」という
用語の登場はともかくとして、平野
謙・山本健吉などに代表される単行本
になった狭義の「文藝時評」のみにと
られず、それを越えて広義の「文藝
時評」的要素をはらんだ諸発言が雑誌、
新聞を練っていると随所に出てくる。
古くは高田半峯の発言、「三人冗語」
における森鷗外らの樋口一葉らに対し
ての讃辞などは抜きにすることは出来
ないし、博文館の「太平洋」も無視出
来ぬ。「白樺」創刊号の武者小路実篤
の漱石の「それから」評(『白樺』)には
志賀直哉自身も珍しく近作時評を書い
ている)、永井荷風の谷崎潤一郎に対
しての讃辞、さらに舟木重雄の志賀直
哉の「留女」評、広津和郎の「志賀直
哉論」をはじめ文学史上重要な諸発言
はすでに幅広く知れわたっている。谷
崎の「藝術一家言」はどうなるのか、
春夫の「退屈読本」は……、「早稲田
文学」の「彙報」欄自体が一種の「文
藝時評」的要素を十分持っていたし、
『白樺』の「六号雑感」として見落すわ

2月/近時文壇の佳作(姉崎嘲風)『時代思潮』
2月/六月文壇(文藝時評)『片山孤村』『中央公論』7月/独歩集を読む(饗庭篁村)『東京朝日新聞』8月22日/月次文壇(無署名)『時代思潮』10月/二百号の四小説を評す(文藝時評)(無名氏)『中央公論』12月/ほか



▼第9巻 明治39年

卅八年の文藝界『東京朝日新聞』1月1日/新春の諸雑誌(藝苑時評)(正宗白鳥)『読売新聞』1月8日/恋愛文学と社会主義(文藝時評)(堺利彦)『中央公論』3月/時評(近松秋江)『東京朝日新聞』3月12日/「破戒」を読む(森田草平)『藝苑』5月/時評(BM)『文章世界』7月/明治文藝史の一区画(二年を回顧す)(時評子)『新声』12月/ほか

▼第10巻 明治40年

一月の小説(文藝時潮)(忘憂子)『読売新聞』1月27日/文藝時評(雑纂)(市野虎溪)『早稲田学報』2月/新年の小説界(彙報)(無署名)『趣味』2月/文壇時言(文藝時評)(醉美生・有頂天)『中央公論』2月/小説時評(本棚)(絲川)『早稲田文学』6月/今日の小説(中里介山)『新声』10月/小説短評(十月)(野上白川)『ホトトギス』11月/十二月の小説界(白雲子)『読売新聞』12月15日/ほか

▼第11巻 明治41年

文壇無駄話(徳田秋江)『読売新聞』1月12日/現実暴露の悲哀(文藝時評)(長谷川天溪)『太陽』1月/新年の文壇(正宗白鳥)『読売新聞』1月5日/小説月評(水野葉舟)『文章世

界』2月/最近の小説壇(徳田秋声・相馬御風・水野葉舟・真山青果)『新潮』3月/小説月評(田山花袋)『文章世界』3月/九月の小説界(蟹生)『新文林』10月/新作月評(窪田空穂)『文章世界』12月/ほか

▼第12巻 明治42年

新年雑誌総まとめ(無署名)『東京二六新聞』1月11日/評論の評論『文章世界』1月/三月の雑誌の内より(木下空太郎)『スバル』4月/六月の小説界(論説)(中村星湖)『早稲田文学』7月/十一月の小説界(論説)(相馬御風)『早稲田文学』12月/十二月の小説界(千葉亀雄)『国民新聞』12月11日/ほか

▼第13巻 明治43年

正月の新聞雑誌(森田草平)『東京朝日新聞』1月11日/評論一年の回顧他(石川啄木)『スバル』1月/一月の創作(中村星湖)『新潮』2月/六月の小説(阿部次郎)『ホトトギス』7月/新作短篇小説批評(志賀直哉)『白樺』8月/評論の論評(相馬御風)『文章世界』10月/十月の創作と評論(白雲子)『学生文藝』11月/ほか

▼第14巻 明治44年

一月の小説(文藝欄)(生田長江)『東京朝日新聞』1月19日/旧臘十二月の小説(鈴木秋風)『学生文藝』1月/新年の重なる小説(前田鬼)『太陽』2月/五月の小説と脚本(無署名)『三田文学』6月/八月の小説評(太田水穂)『国民新聞』8月22日/十月号の雑誌(高浜虚子)『ホトトギス』11月/四十四年の文壇(文藝時評)(金子筑水)『太陽』12月/ほか

▼第15巻 明治45年・大正元年

新年雑誌読後の感(文藝)(正宗白鳥)『読売新聞』明治45年1月7日/読後雑感(徳田秋声)『時事新報』2月29日/二月の小説を読む(水野仙舟)『青鞥』明治45年3月/七月の創作(劇と詩)(無署名)大正元年8月/七月の文壇(加能作次郎)『早稲田文学』8月/文壇筆の雫(生方敏郎)『やまと新聞』大正元年8月17日/読んだだけ(安成貞雄)『近代思想』大正元年11月/ほか

▼別巻

解説明治期における「文藝時評」の位置(中島国彦) 収録文一覧 索引(宗像和重編)



●「三人冗語」の人々。左より森鷗外、幸田露伴、斎藤緑雨。

けにはいかない。「帝国文学」における江口渙などの連続的な時評とて同様。しかもそれらはすでに復刻もされ、研究者の間ではすでに知悉のものばかりである。

入手し難い同人雑誌のなかにも有益にして刺激的な同時代批評がごろごろと出てくる。先日大森時代の尾崎士郎中心の「没落時代」をはじめ見て、尾崎はじめ雅川渥らの発言のなかに、この時代の実態がしかとこいまみられた。丹羽文雄の「鮎」の批評がどのように拾い出されてくるか。書評にしてもそのなかに同時代批評も含まれている。山川均らの時評も文藝とかわっている。それらをどのように収集し、どう整理するのか。詩歌、戯曲の場合はどうなるのか。ひとつの雑誌を中心にして縦軸に見ていくやりかたも考えられるが、このたびはこれを横軸で展開するという。小林秀雄的な「文藝時評」も当然入ってくるが、それと同時にその時代の諸雑誌、新聞などに、まさにごみのような発言が多くあり、それが時代の潮流と呼応もするし、相互の切磋琢磨ともなり、他には見られぬ貴重な砂金がまじっている可能性が十分にある。

諸雑誌、諸新聞の類を編集の人ほどれほど多量に眺めわたし、知悉の主軸とともに幾粒の砂金を拾いあげてくれるか、楽しみである。完結すれば近代文学史の同時代批評の最上層部と埋めかかった底辺を凝視、それらすべてを洗い出す批評的発言の束となるであろう。

大正篇 (全14巻+別巻)



〔正宗白鳥〕『中央公論』11月/十二月の創作と評論(青木健作) 『時事新報』12月4日/ほか

▼第4巻 大正5年

広津和郎評論(文藝) 正月の創作(広津和郎) 『洪水以後』1月/文壇時事 文藝批評の意義・チャールズ・メイヤーズと藝術(小川未明) 『新潮』2月/時評 白鳥雷鳥天溪諸氏の評論(三井甲之) 『帝國文學』3月/五月の評論・五月の小説(本間久雄・中村星湖) 『早稲田文學』6月/六月の創作(上司小剣・若塘生・溝口白羊) 『新日本』7月/九月の創作(福永挽歌) 『時事新報』9月6日/文藝評論(森口多里) 『日本評論』10月/文壇は果して不振である乎(文藝時評) (和辻哲郎) 『新小説』12月/ほか

▼第5巻 大正6年

新年の諸作家(赤木桁平) 『時事新報』1月1日/一月の雑誌から(江口渙) 『星座』2月/四月の小説から(加能作次郎) 『国民新聞』4月11日/読んだ儘の印象を(広津和郎) 『時事新報』5月10日/感想二三(金子洋文) 『日本評論』7月/九月の文壇(中村星湖) 『読売新聞』9月15日/狐塚にて(前田晃) 『時事新報』11月8日/今年の創作界に就て(和辻哲郎) 『黒潮』12月/ほか

▼第6巻 大正7年

武者小路、正宗両氏の物作から(新年創作評) (広津和郎) 『時事新報』1月20日/新年の創作を評す(豊島与志雄) 『文章世界』2月/初めて試みる創作評(水野仙子) 『時事新報』3月5日/自然主義のどん詰りか(中村星湖) 『時事新報』8月25日/九月の創作の内から(長田秀雄) 『読売新聞』9月4日/時評 告白文藝の二派(加藤朝鳥) 『雄弁』10月/時事印象十月の文壇(堀木克三) 『秀才文壇』11月/文藝時評(生田長江) 『中外』12月/ほか

▼第7巻 大正8年

十二月の文壇(細田源吉) 『早稲田文學』1月/放漫録 二月の雑誌総評(武林無想庵)

▼第1巻 大正2年

十二月の小説(荒畑寒村) 『近代思想』1月/一月文壇の概評(千葉亀雄) 『文章世界』2月/四月の文藝雜評(松原至大) 『東京日日新聞』4月12日/四月文壇の印象(鈴木悦) 『早稲田文學』5月/七月の創作(中村星湖) 『読売新聞』7月5日/七月の文壇(白石実三) 『文章世界』8月/浴後雜感 八月の文壇一瞥(井川滋) 『時事新報』8月16日/十一月の創作界(徳田秋声) 『時事新報』11月11日/ほか

▼第2巻 大正3年

新年の文壇(田山花袋) 『時事新報』1月1日/新年の小説其他(徳田秋江) 『新潮』2月/二月の評論(内藤濯) 『読売新聞』2月11日/三月の文壇(岩野泡鳴) 『文章世界』4月/四月の創作(西條八十) 『仮面』5月/七月の創作(上司小剣) 『読売新聞』7月14日/最近に読んだ物から(生田長江) 『反響』9月/本年の創作界(中村星湖) 『読売新聞』12月10日/ほか

▼第3巻 大正4年

文藝評論(木下左太郎) 『太陽』1月/文藝評論(中村星湖) 『第三帝國』2月/五月の創作(武林無想庵) 『時事新報』5月10日/興味中心の文壇(相馬御風) 『早稲田文學』9月/旅先で読んだ九月の小説(素木しづ) 『時事新報』9月18日/十月の創作と評論、其他(久米正雄) 『時事新報』10月12日/文藝時評 藝術の力

『読売新聞』1月1日/二月の創作(浜田広介) 『文章世界』3月/若葉の窓にて 五月号創作の印象(南部修太郎) 『読売新聞』5月1日/六月の文壇(芥川龍之介) 『東京日日新聞』6月3日/七月の雑誌と私(佐藤春夫) 『新潮』8月/「人間」創刊号を読む(中戸川吉二) 『読売新聞』11月21日/歳末文壇 雜感(木村毅) 『国民新聞』12月10日/ほか

▼第8巻 大正9年

十二月の文壇 初めての月評(片岡良二) 『サンス』1月/新春文壇の概評(岡田三郎) 『太陽』2月/合評「三月の文壇」(有島武郎・里見淳・馬場孤蝶・岩野泡鳴・江口渙・徳田秋声・白石実三・宮島新三郎・田山花袋) 『読売新聞』3月6日/五月の創作評(平林初之輔) 『時事新報』5月5日/創作月旦 五月の文壇の印象(吉田絃二郎) 『新潮』6月/七月の雑誌を見て(安倍能成) 『読売新聞』7月7日/創作月旦 八月の文壇(谷崎精二) 『新潮』9月/十月の文壇(水守亀之助) 『時事新報』10月6日/ほか

▼第9巻 大正10年

『冥途』其他(森田草平) 『読売新聞』1月24日/人間合評 その一 正月号創作(小山内薫・久保田万太郎・中戸川吉二・吉井勇・久米正雄・里見淳) 『人間』2月/五月の創作評(西川勉) 『小説俱樂部』6月/新進作家の意義(村松正俊) 『読売新聞』8月20日/九月の雑誌から(葛西善蔵) 『時事新報』9月8日/批評(村松正俊・金子洋文・松本弘二) 『種時く人』10月/普通席から見た文壇(前田河広一郎) 『読売新聞』11月16日/大正十年の文壇(古賀龍視) 『国民新聞』12月24日/ほか



同時代の評判が 伝達につながる

谷沢永一 関西大学名誉教授

現代社会では、能や歌舞伎や新劇など、舞台上で上演される伝統演劇よりも、身近なテレビドラマの方こそ同時に多数者から迎えられる、つぎつぎと名作が出現して、比較すれば圧倒的な優位に立っている。実状が疑いもなくそうでありながら、逆に電波演劇が軽んじられ忘れられてゆくのは何故か。能に能評あり劇場興行に劇評あり、そしてテレビドラマ評がメディアの次元でおこなわれないからである。

菊池寛がちよっと拗れて嘆いたように、文藝作品もそれ自体としてなから、十年の寿命をもって足れりと諦めざるをえないであろう。しかし文藝作品に関するかぎり、同時代評と文学論の広範囲と文学史の記述に包まれて、幸いにも後世に伝え残されることのできた。とくに小説は美術と異なっており、時代ごとに移り変わる読解の姿勢に頼らざるをえない。評判が製作者と読者社会の架け橋となってきたと思われる。

昭和篇Ⅰ (全19巻＋別巻)



第1巻 昭和2年

新年の小説(米川正夫)『都新聞』1月16日／大衆文藝批評 悪筆探偵漫談(新年号月評) (梅原北明)『文藝市場』2月／断想的な時評 (伊藤永之介)『文藝時代』3月／女流作家月旦 (平林たい子)『若草』7月／読んだものから 同人雑誌評(浅見淵)『文藝城』9月／文藝時評 芥川氏その死・その他(神近市子)『若草』10月／十月の創作批評(浅原六朗)『不同調』11月／昭和二年の文藝・劇・映画一九二七年の文藝評論(勝本清一郎)『新潮』12月／ほか

第2巻 昭和3年

一月のプロレタリア文学(蔵原惟人)『前衛』2月／新年同人雑誌の創作短評(上林暁)『風車』2月／文藝時評(室生犀星)『新潮』4月／文藝時評(雅川湜)『成瀬正勝』『新思潮』(第九次)7月／時評 作品の社会的責務(新居格)『都新聞』9月8日／月評 九月の作品(小宮山明敏)『創作時代』10月／時評 プロレタリア文学の大衆性について(青野季吉)『都新聞』11月19日／昭和三年文藝大観 附詩壇(生田花世)『女人藝術』12月／ほか

第3巻 昭和4年

時評二つ(高見順)『帝国大学新聞』1月14日／プロレタリア文学の勝利(江口渙)『新愛知』1月28日／文藝時評(横光利一)『読売新聞』3月12日／四月号雑誌の創作及評論について(阿部知二)『文藝都市』5月／文藝月評(中本たか子)『女人藝術』8月／文藝月評(読んだものから) 十月の月評(中野重治)『新潮』11月／反マルクス主義者の最近の態度について

及十一月創作評(吉行エイスケ)『文藝レビュ』12月／注目される四作品(蔵原惟人)『東京朝日新聞』12月11日／ほか

第4巻 昭和5年

文藝時評(久野豊彦)『近代生活』2月／文藝時評(龍胆寺雄)『近代生活』4月／アシルと亀の子(文藝時評)(小林秀雄)『文藝春秋』4月／月評 切実なる反映(瀬沼茂樹)『文藝レビュ』5月／文壇時評(千葉亀雄)『東京朝日新聞』8月29日／肌を見せない藝術 少しばかり文藝時評的に(河上徹太郎)『作品』11月／文藝時評(谷川徹三)『東京朝日新聞』11月5日／十一月の小説(丸岡明・庄野誠一)『三田文学』12月／ほか

第5巻 昭和6年

文藝時評 小説の将来性其他(阪本越郎)『文藝レビュ』1月／二月雑誌月評(松永延造)『時事新報』2月1日／僕の鈍刀と赤鉛筆(十和田操)『新科学的』5月／文藝時評 時々、肩を聳やかして!(小林多喜二)『中央公論』5月／明日の……文学を語る(伊藤整)『時事新報』5月24日／文藝時評(窪川鶴次郎)『帝国大学新聞』10月12日／最近の文壇より(板垣直子)『火の鳥』11月／文藝時評(大宅壮一)『文学時代』12月／ほか

第6巻 昭和7年

志賀朝再興 文藝時評(中山義秀)『新早稲田文学』1月／文藝時評(岩藤雪夫)『改造』2月／文藝時評(すこし露骨に)(前田河広一郎)『文戦』4月／四月の作品 『文藝春秋』と『改造』(飯島正)『近代生活』5月／文藝時評 文学の真について(三木清)『改造』7月／文学時評(保田与重郎)『コギト』7月／七月左翼文学展望(鹿地亘)『時事新報』7月2日／文藝時評(亀井勝一郎)『北海タイムス』11月13日／ほか

第7巻 昭和8年

作家から作家へ 文藝時評(里見弴)『文藝春

秋』1月／文学時評 問題的小説(保田与重郎)『コギト』2月／文藝時評(西脇順三郎)『東京朝日新聞』2月28日／文藝時評(中條百合子)『宮本百合子』『国民新聞』4月6日／文藝時評 作家の倫理の問題(大岡昇平)『作品』6月／文藝時評(舟橋聖一)『報知新聞』7月22日／文藝時評 新雑誌への評価、新人への不満、十月の小説、同人雑誌の態度(十返一)『十返壺』『翰林』10月／文藝時評 作家の文学と随筆的小説(矢崎弾)『経済往来』11月/1933の文学は我等に何を与えたか?(その二) 創作壇の印象 現象的に見る(尾崎士郎)『行動』12月／ほか

第8巻 昭和9年(上)

文藝時評 作者の「私」に就いて(豊島与志雄)『文藝』1月／新春文藝 創作合評座談会(井伏鱒二ほか)『信濃毎日新聞』2月3日／三月作品評(古木鉄太郎)『帝国大学新聞』2月26日／文藝時評(林芙美子)『改造』3月／創作批評(春山行夫)『都新聞』4月2日／六月の創作評(本庄陸男)『東京朝日新聞』6月2日／文藝時評(芹沢光治良)『読売新聞』6月4日／文藝時評 七月の創作 作品に流れる五つの傾向(村山知義)『帝国大学新聞』6月25日／ほか

第9巻 昭和10年(下)

プロレタリア文学の現勢 最近の論争と作品について(森山啓)『中央公論』7月／文藝時評(三好達治)『国民新聞』8月29日／文藝時評 婦人作家の作品(武田麟太郎)『改造』9月／文藝時評 転向作家の喜劇性文学的リベラリズム(春山行夫)『セルバン』10月／文藝時評(丹羽文雄)『文藝首都』10月／憎まれ者の時評(片岡鉄兵)『東京朝日新聞』11月24日／十二月の小説(江口渙)『九州日報』12月10日／時評(宇野浩二)『中外商業新報』12月29日／ほか

第10巻 昭和10年(上)

文藝時評(尾崎士郎)『国民新聞』1月5日／文藝時評(壺井繁治)『文学評論』2月／文藝時評(荒木巍)『文藝』2月／文藝時評(中村光夫)『文学界』3月／三月号を読んで 三月の作品(伊藤整)『文藝通信』4月／文藝時評 枯淡の風格を排す(坂口安吾)『作品』5月／

画期的な試み

安藤 宏 東京大学準教授

……推薦のことば……
手書きの原稿は実際に出版され、社会的な反響を得ることによって初めて「作品」となる。その意味でも発表直後の文壇での評価——同時代評——の持つ意味は重要だ。だが、雑誌の発売日にあたりを待つ、その前後の日刊紙の文藝時評をマイクロリールで捜していく労苦は並大抵のものではない。また、新聞に限らず月刊誌の時評も、すでに閲覧が困難なものが多い。その意味でも今回の企画は画期的なものであり、索引をうまく使いこなすことができれば、今後多くの埋もれた資料を掘り起こすことが可能になるのではないか。これによって書庫にもぐる機会が減ることになる自分がおそろしい気もするが、近代文学を研究していくにあたって、先ず第一に参照すべき書になることだけはまちがいあるまい。

「職人風」に 文藝時評(三好十郎) 『早稲田文学』6月/文藝時評(室生犀星) 『報知新聞』6月27日/ほか

▼第11巻 昭和10年(下)

創作月評 月評的感想 才能、階級性のことなど(窪川鶴次郎) 『文学評論』7月/六月号を讀みて 誰に見せうとて(岡田禎子) 『文藝通信』7月/文藝時評 文壇の消滅(春山行夫) 『行動』7月/文藝時評 文壇的批評と非文壇的批評(伊藤整) 『セルバン』9月/文藝時評(浅見淵) 『文藝首都』10月/文藝時評(山岸外史) 『三田文学』11月/文藝時評(浅原六朗) 『満洲日日新聞』12月3日/文藝時評(高田保) 『東京日日新聞』12月21日/ほか

▼第12巻 昭和11年(上)

作品批評の衰微 文藝時評(古谷綱武) 『作品』1月/文藝時評(檀一雄) 『日本浪漫派』1月/文藝時評 知識人の苦悶 高校生・狂人・癩患者の世界(渡川驍) 『帝国大学新聞』2月3日/三月号の印象(川崎長太郎) 『国民新聞』3月6日/創作批評日記(円地文子) 『人民文庫』4月/文藝時評(衣巻省三) 『文藝汎論』4月/大きい犬と小さい犬 文藝時評(高見順) 『文藝通信』5月/文藝時評 作品評を主として(関宮茂輔) 『文学評論』6月/ほか

▼第13巻 昭和11年(下)

虚無の雑沓 新潮・文藝春秋の作品に就て(田宮虎彦) 『人民文庫』7月/文藝時評(川端康成) 『文学界』9月/作家の教養の問題(文藝時評)(本多顕彰) 『文藝通信』9月/ヒューマニズム論議 文藝時評(森山啓) 『文藝春秋』10月/十月の創作欄から(島木健作) 『新愛知』10月3日/文藝批評を嗤ふ(橋本英吉) 『中外商業新報』11月13日/文藝時評 作品、評論、単行本(山室静) 『批評』11月/今年の歴史文学の回顧(貴司山治) 『報知新聞』12月23日/ほか

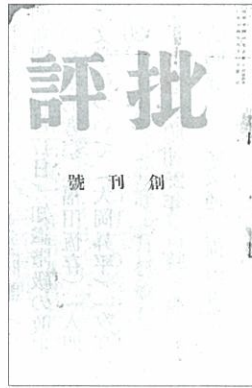
▼第14巻 昭和12年

文藝時評 文学を信ずるといふこと(阿部知二) 『文藝通信』1月/連名文藝時評(新田潤・本庄陸男・荒木巍) 『中外商業新報』3月2日/文藝時評(神西清) 『報知新聞』4月24日/文

藝時評(中村地平) 『日本浪漫派』7月/人間の回復 文藝時評(山室静) 『批評』7月/文藝時評(中條百合子) 『報知新聞』8月25日/文化月報 小説 アンファン・テリイブル(小説に現れた現代青年)(林房雄) 『文学界』9月/文藝時評(井伏鱒二) 『信濃毎日新聞』11月29日/ほか

▼第15巻 昭和13年

小説について(舟橋聖二) 『文学界』1月/文藝時評(佐藤俊子(田村俊子)) 『東京日日新聞』3月2日夕刊/長篇の流行と短篇要望 文藝時評(浅見淵) 『早稲田大学新聞』4月27日/現代作家の病根 文藝時評(富沢有為男) 『早稲田大学新聞』5月25日/文藝時評(水原秋桜子) 『東京日日新聞』6月28日夕刊/文藝時評(伊吹武彦) 『東京日日新聞』8月2日夕刊/文藝時評(板垣直子) 『都新聞』10月31日/文藝時評(大井広介) 『槐』12月/ほか



▼第16巻 昭和14年

文藝時評「中央公論」「文藝春秋」「改造」(田辺茂二) 『文学者』1月/満洲文藝時評(北村謙次郎) 『満洲新聞』1月27日/文藝月評(小熊秀雄) 『中央公論』4月/文藝月評(中野好夫) 『東京日日新聞』4月27日夕刊/文藝月評(古谷綱武) 『国民新聞』6月26日/呪はれた才能 文藝時評(片岡鉄兵) 『文藝春秋』9月/描かれたる現実 文藝時評(岩上順二) 『中央公論』10月/本年度満洲文学界回顧(緑川真) 『満洲日日新聞』12月24日/ほか

▼第17巻 昭和15年

文藝時評(南川潤) 『国民新聞』1月30日/帰還作家の問題 文藝時評(林房雄) 『文藝春秋』

3月/文藝時評(豊島与志雄) 『読売新聞』3月1日/作と作中の問題 文藝時評(中野重治) 『日本評論』4月/文藝時評(徳永直) 『都新聞』5月30日/五月の小説(稲垣達郎) 『早稲田文学』6月/文藝時評(檀一雄) 『満洲新聞』8月27日/文藝時評(三上秀吉) 『中外商業新報』9月26日/文藝時評(宮内寒弥) 『文学者』11月/ほか

▼第18巻 昭和16年~17年

昭和16年 文藝時評(平野謙) 『文学者』1月/創作月評 二月(高木卓) 『帝国大学新聞』2月3日/文藝時評(北原武夫) 『都新聞』6月28日/文藝時評(阿部知二) 『日本評論』12月/ほか 昭和17年 作者と素材について 同人雑誌創作月評(福田恆存) 『新文学』4月/同人雑誌月評(柴田鍊三郎) 『三田文学』4月/文藝時評 私の崩壊について(赤木俊「荒正人」) 『現代文学』4月/文藝時評(坂口安吾) 『都新聞』5月10日/文藝時評 主観性の衰弱(伊藤永之介) 『新潮』10月/ほか

▼第19巻 昭和18年~20年

昭和18年 文藝時評 バルトロオの歌(花田清輝) 『現代文学』年1月/青春の文学(文藝時評)(佐々木基一) 『日本評論』2月/文藝時評(赤木俊「荒正人」) 『現代文学』6月/文藝時評(八木義徳) 『早稲田文学』10月/文学の動向 昭和十八年の小説(窪川鶴次郎) 『新文化』年12月/ほか 昭和19年二月の小説(宮内寒弥) 『文藝』3月/最近の作品(文藝時評)(保高德蔵) 『文藝首都』6月/戦記と小説手法 文藝時評(山本健吉) 『文藝』7月/小説界の印象 新人の作品を中心として(伊藤整) 『新潮』12月/ほか 昭和20年 文藝時評 光を見失はずに(板垣直子) 『藝苑』10月/解放への責務(文藝時評)(洪川驍) 『日本文学』12月/ほか

▼別巻

解説 昭和戦前期の文藝時評(池内輝雄) 収録文一覧 索引(宗像和重編)

……推薦のことば……

時評がつくる 文藝批評の世界

山本芳明 学習院大学教授

文藝批評というジャンルが、文藝ジャーナリズムの発達とともに形成されてきたことは、周知の事実だろう。日本の場合、特に注目されるのは、新聞・雑誌に大量に発表された文藝時評が重要な役割を果たしたことである。しかし、小林秀雄以前に、継続的に文藝批評に携わる批評家がほとんどいなかったことに象徴されるように、その道程は平坦なものではなかった。これまで読み捨てられることの多かった文藝時評には、多種多様な「事件」が隠されているのである。我々は、本大系によって、「事件」の現場に臨場感をもって立ち会うことができ、ひいてはジャンルの成立のメカニズムや文藝批評の文化的位置づけの変遷なども明らかにできるはずだ。本大系が期待される所以である。

昭和篇Ⅱ (全13巻+別巻)



界日報』6月14日/文藝時評(安部公房)『時事新報』7月30日/此の二者のうち 日記抄の文藝時評(遠藤周作)『三田文学』10月/文化一年の歩み 文学界(上林暁)『第一新聞』12月22日/ほか

▼第4巻 昭和24年

文藝時評 古風な作家達(瀬沼茂樹)『新日本文学』2月/同世代への時評(島尾敏雄)『夕刊新大阪』3月2日/文藝時評 文学診療簿(河盛好蔵)『社会』5月/戦後文学の流行批判(世界への反逆(中島健蔵)『読売新聞』6月11日/文藝時評 戦争責任と平和運動(杉浦明平)『新日本文学』8月/文芸時評(加藤周二)『学園新聞』10月17日/知識階級の敗退 一九四九年の文壇的考察(福田恆存)『人間』12月/記録文学について(大岡昇平)『夕刊新大阪』12月20日/ほか

▼第5巻 昭和25年

文藝時評 対面交通(福田恆存)『改造文藝』1月/文芸時評(吉川幸次郎)『夕刊毎日新聞』1月7日/文藝時評(中村真一郎)『東京日日新聞』2月27日/文芸時評(外村繁)『東京新聞』4月9日/創作月評 五月号(山本健吉)『東京日日新聞』4月30日/宇宙的なるもの 文藝時評(武田泰淳)『人間』6月/文藝時評(菱山修三)『産業経済新聞』8月30日/雑誌小説と労働者の小説 文藝時評(野間宏)『文学サークル』11月/ほか

▼第6巻 昭和26年

文藝時評(平野仁啓)『夕刊信毎』1月16日/二十世紀文学の変貌 文藝時評(佐藤朔)『中央公論』2月/小説月評(井上靖・吉田健一・椎名麟三)『文学界』2月/小説文学のにぎにぎしさ(本多秋五)『東京タイムズ』3月9日/文芸時評(北原武夫)『東京新聞』5月7日/夕刊/文芸時評(三好十郎)『毎日新聞』7月25日/小説月評(浅見淵・石上玄一郎・八木義徳)『文学界』10月/文芸時評(石上玄一郎)『東京新聞』11月4日/夕刊/ほか

▼第7巻 昭和27年

文芸時評(手塚富雄)『毎日新聞』1月23日/文芸時評(河上徹太郎)『北国新聞』2月26日/文藝時評 戦争の傷痕(岩上順一)『人民文学』3月/文学の出発点について 文藝時評(山室静)『近代文学』5月/文芸時評(神西清)『東京新聞』5月2日/雑誌月評(青山光二)『全国出版新聞』8月25日/小説月評(平野謙・梅崎春生・吉田健一)『文学界』10月/文芸時評(堀田善衛)『東京新聞』10月30日/夕刊/文芸時評(山本健吉)『京都新聞』12月8日/ほか

▼第8巻 昭和28年

切抜帖 文藝時評(阿川弘之)『新潮』1月/私の文藝時評(白洲正子)『読売新聞』2月21日/三月号の雑誌創作評(梅崎春生)『神戸新聞』2月27日/文芸時評(木下順二)『読売新聞』5月1日/文芸時評(堀田善衛)『産業経済新聞』6月2日/同人雑誌評(中村真一郎)『文学界』7月/文学時評(西村孝次)『明治大学新聞』10月5日/文芸時評(小野十三郎)『新大阪』11月5日/夕刊/文藝時評 十二月月号(日沼倫太郎)『図書新聞』12月5日/ほか

▼第9巻 昭和29年

文壇の第三新人群(十返肇)『神戸新聞』1月20日/雑誌月評(奥野健男)『全国出版新聞』1月25日/文芸時評 批評の衰弱と頹廢(武井昭夫)『新日本文学』2月/私の文芸時評(山本周五郎)『読売新聞』4月29日/文芸時評(服部達)『三田文学』5月/文芸時評(伊藤整)『朝日新聞』8月3日/一群の新人作家(寺田透)『中部日本新聞』11月8日/十二月の諸雑誌を読んで(船山馨)『東京タイムズ』12月2日/ほか

▼第10巻 昭和30年

文藝時評 文明の感覚と現代文学(中村真一郎)『群像』1月/文芸時評 3月号(日野啓三)『図書新聞』3月5日/文芸時評 外とのつながり(なかのしげはる)『新日本文学』4月/文芸時評 ロビンソンの読書(堀谷雄高)『群像』8月/文芸時評(吉田健一)『中部日本新聞』8月25日/文芸時評 なぜ民主主義文学は不毛か(山室静)『群像』10月/文芸時評

(富士正晴)『新大阪』10月9日/夕刊/文芸時評(梅崎春生)『東京新聞』11月28日/夕刊/ほか

▼第11巻 昭和31年

若い人の作品と暴力(小島信夫)『北海道新聞』3月22日/図星をさす白鳥の一言(白井吉見)『日本経済新聞』3月28日/五月号の文芸時評(西村孝次)『産経時事』4月30日/文芸時評7月号(佐伯彰一)『日本読書新聞』6月25日/文芸時評 「自由」と「国民」の統一(山下肇)『新日本文学』9月/文芸時評 戦争責任の問題(本多秋五)『群像』10月/文芸時評(三浦朱門)『東京新聞』11月29日/夕刊/文芸時評12月号(井上光晴)『図書新聞』12月1日/ほか

▼第12巻 昭和32年

文藝時評(進藤純孝・佐伯彰一・日野啓三・久保田正文)『近代文学』2月/文芸時評(堀田善衛)『東京新聞』2月28日/夕刊/文芸時評『太陽の季節』以後(山田彦)『学園新聞』4月22日/文芸時評(福永武彦)『中部日本新聞』4月28日/文芸時評 7月号(白井健三郎)『日本読書新聞』6月24日/文芸時評 伊藤整氏の『氾濫』をめぐって(北原武夫)『群像』9月/文芸時評(遠藤周作)『京都新聞』10月9日/文芸時評 新年号(白井浩司)『産経時事』12月17日/ほか

▼第13巻 昭和33年

文芸時評 新年号(江藤淳)『日本読書新聞』1月1日/創作合評 129回(中村真一郎・福永武彦・加藤周二)『群像』2月/文芸時評(大岡昇平)『東京新聞』3月26日/夕刊/文芸時評(堀谷雄高)『東京新聞』4月25日/夕刊/文芸時評(篠田一士)『日本読書新聞』6月30日/人生の屈辱 上半期の小説の中から(正宗白鳥)『読売新聞』7月7日/夕刊/文芸時評(福田宏年)『河北新報』11月9日/文芸時評(中村真一郎)『東京新聞』12月22日/夕刊/ほか

▼別巻

解説 戦後における文芸時評の再生と大衆化(曾根博義) 収録文一覧 索引(宗像和重編)

▼第1巻 昭和21年

作家と批評家 文藝時評(野口富士男)『東国』2月/文芸時評(平野謙)『文化新聞』2月18日/くさくさの思ひ 文藝批評(なかのしげはる)『朝日評論』4月/発足点で(文藝時評(荒正人)『潮流』6月/創作月評(石川利光)『新人』7月/終戦後の文学(白井吉見)『文学季刊』8月/小説月評(浜川暁・中山義秀・青野季吉・井上友一郎・三島由紀夫・平野謙)『人間』10月/文芸時評 門前説経(渡辺一夫)『東京新聞』11月30日/夕刊/ほか

▼第2巻 昭和22年

既成「文学」への抗議 未来のために(坂口安吾)『読売新聞』1月20日/文芸時評(小沼丹)『早稲田文学』2月/創作短評(上林暁・檜崎勤・山本健吉)『人間』3月/創作合評会(青野季吉・伊藤整・中野好夫)『群像』4月/文藝時評(浅見淵)『風雪』4月/戦後の文学界(岩上順一)『前衛』6月/作品短評(上林暁・木下順二)『人間』7月/小説 スティルに就て(野間宏)『綜合文化』9月/現代文学の低迷(小田切秀雄)『綜合文化』12月/ほか

▼第3巻 昭和23年

文藝時評 実存の問題(平田次三郎)『進路』2月/文芸時評(三島由紀夫)『時事新報』2月17日/文芸時評(杉森久英)『四国春秋』4月/勤労者文学について 文芸時評(佐多稲子)『勤労者文学』5月/文芸時評(豊田三郎)『世

昭和篇Ⅲ (全12巻+別巻)

▼第1巻 昭和34年

文芸時評(小島信夫)『週刊読書人』1月1日/文芸時評(安岡章太郎)『東京新聞』2月22日夕刊/文芸時評 理念と実作とかけ橋を(竹西寛子)『早稲田文学』3月/文芸時評 批評の弾着距離(大西巨人)『新日本文学』7月/文芸時評『文学の曲り角』を解く(進藤純孝)『批評』7月/文芸時評(吉本隆明)『図書新聞』9月5日/文芸時評(三浦朱門)『東京新聞』10月23日夕刊/文芸時評(清岡卓行)『日本読書新聞』10月26日/ほか

▼第2巻 昭和35年

文芸時評(平林たい子)『東京新聞』1月26日夕刊/文芸時評(矢代静二)『図書新聞』2月13日/文芸時評(針生一郎)『日本読書新聞』3月7日/対談・文芸時評 喜劇性と批評性(奥野健男・安部公房)『新日本文学』6月/九月号の文芸作品から(吉田健一)『東京タイムズ』8月19日/文芸時評(高見順)『東京新聞』9月29日夕刊/小説における市民性 文芸時評(中村真一郎)『文学界』10月/文芸時評(十返肇)『風景』12月/ほか

▼第3巻 昭和36年

二月号の文芸作品(丸谷才一)『新潟日報』1月21日夕刊/文芸時評(阿川弘之)『風景』4月/文芸時評(小田実)『東京大学新聞』4月26日/文芸時評(古林尚)『図書新聞』5月20日/文芸時評(磯田光一)『日本読書新聞』6月26日/創作合評 一七二回(三島由紀夫・庄野潤三・安部公房)『群像』9月/文芸時評(野島秀勝)『図書新聞』12月16日/ことしの読売小説ベストスリー(小松伸六)『読売新聞』12月27日夕刊/ほか

▼第4巻 昭和37年

文芸時評(柴田翔)『東京大学新聞』1月24日/文芸時評(宗左近)『日本読書新聞』3月26日/文学の変容のために 文芸時評(篠田一士)『文学界』4月/文芸時評(磯田光一)『東京大学新聞』5月30日/文芸時評(和田芳恵)

『図書新聞』9月29日/文芸時評(いいた・もも)『日本読書新聞』10月29日/62年ベスト5(河上徹太郎・河盛好藏・平野謙・中村光夫・江藤淳)『朝日新聞』夕刊/文芸時評(村松剛)『東京新聞』12月22日夕刊/文芸時評(林房雄)『朝日新聞』12月25日/ほか

▼第5巻 昭和38年

文芸時評(小野二郎)『日本読書新聞』1月7日/三月号の文芸雑誌(青柳瑞穂)『北国新聞』2月27日/文芸時評(菅野昭正)『日本読書新聞』3月25日/文芸時評(栗田勇)『図書新聞』6月1日/文芸時評(青山光二)『風景』10月/文芸時評(進藤純孝)『東京タイムズ』10月2日/虚像と実像 文芸時評(福田宏年)『文学界』11月/文芸時評(高橋和巳)『図書新聞』11月30日/ほか

▼第6巻 昭和39年

文学 1月の状況(佐古純一郎)『週刊読書人』1月1日/文芸時評(月村敏行)『日本読書新聞』2月3日/「相対」の彼方 文芸時評(野島秀勝)『文学界』4月/大衆文学時評(吉田健一)『読売新聞』4月4日夕刊/文芸時評(日沼倫太郎)『日本読書新聞』6月1日/文芸時評(野口武彦)『東京大学新聞』6月24日/新人の季節 時評的に(小沢信男)『文学者』7月/文芸時評(佐伯彰一)『神戸新聞』12月31日/ほか

▼第7巻 昭和40年

文芸時評(瀬沼茂樹)『東京新聞』1月23日夕刊/文学 4月の状況(西義之)『週刊読書人』3月29日/大衆文学時評(吉田健一)『読売新聞』6月4日夕刊/人間の尊厳と運命 文学時評(二) (河上徹太郎)『新潮』7月/余裕なき批評への不満 文芸時評(堀田善衛)『文学界』9月/文壇小説の陥没 文芸時評(松本清張)『文学界』11月/異端者と大衆 文芸時評(三浦朱門)『文学界』12月/ことしの読売小説ベスト3(中村光夫)『読売新聞』12月24日夕刊/ほか

▼第8巻 昭和41年

文芸時評(日野啓三)『週刊読書人』1月17日/時評(文芸) (森川達也)『図書新聞』2月5日/迷路のなかで 文芸時評(鳥尾敏雄)『文学界』3月/文芸時評(月村敏行)『日本読書新聞』3月28日/くく率直な感想 文芸時評(秋山駿)『文芸』5月/文芸時評(本多秋五)『東京新聞』6月30日夕刊/文芸時評(進藤純孝)『産経新聞』10月27日夕刊/中間小説時評(浅見淵)『東京新聞』11月14日夕刊/ほか

▼第9巻 昭和42年

文芸時評(大岡昇平)『朝日新聞』1月27日夕刊/新人作品評 健やかな状況(桂芳久)『三田文学』2月/文芸時評(松原新一)『週刊読書人』3月6日/文芸時評(渡辺広土)『週刊読書人』7月3日/文芸時評(久保田正文)『京都新聞』7月29日/文芸時評(桶谷秀昭)『日本読書新聞』9月4日/文芸時評(篠田一士)『東京新聞』11月27日夕刊/文芸時評(磯田光一)『信濃毎日新聞』12月21日/ほか

▼第10巻 昭和43年

文芸時評(上田三四二)『週刊読書人』1月29日/文芸時評(中村真一郎)『産経新聞』3月26日夕刊/大衆文学時評(今官一)『信濃毎日新聞』5月16日/文芸時評 伝統と前衛の谷間で(笠原伸夫)『南北』6月/時評(文芸) (小久保実)『図書新聞』7月13日/文芸時評(天沢退二郎)『日本読書新聞』11月11日/ことしの回顧ベスト5(大岡昇平・山本健吉・小島信夫)『朝日新聞』12月10日夕刊/1月の小説(安岡章太郎)『毎日新聞』12月25日夕刊/ほか

▼第11巻 昭和44年

座談会 問題作をどう評価するか 文芸時評(60年) (小島信夫・平野謙・中村真一郎・吉田健一・篠田一士)『文学界』1月/同人雑誌時評(小松伸六)『文学界』2月/時評(文芸) (饗庭孝男)『図書新聞』4月12日/文芸時評 ある文学遺産の問題点について(鶴岡冬一)『宴』6月/文芸時評(奥野健男)『サンケイ』8月30日夕刊/時評(文芸) (田畑麦彦)『図書新聞』11月8日/ことしの読売小説ベスト3(磯田光一)『読売新聞』12月18日夕刊/文芸時評(石川淳)『朝日新聞』12月25日夕刊/ほか

▼第12巻 昭和45年

文芸時評(川村二郎)『信濃毎日新聞』1月22日/文芸(上田三四二)『週刊読書人』2月2日/文芸時評(黒田喜夫)『日本読書新聞』3月23日/文芸時評(秋山駿)『東京新聞』5月28日夕刊/文芸季(四月号~六月号)(入江隆則)『季刊藝術』7月/文芸季評(七月号~九月号)(柄谷行人)『季刊藝術』10月/文芸(亀井秀雄)『週刊読書人』12月7日/ほか

▼別巻

解説 文学の黄金時代における文芸時評(曾根博義) 収録文一覧 索引(宗像和重)編



●「近代文学」の人々。前列左より花田清輝、佐々木基一、椎名麟三、高桑純夫、荒正人。後列左より平野謙、本多秋五、埴谷雄高、平田次三郎、野間宏(昭和23年、東大構内にて)

● ゆまに書房 創立三〇周年記念出版 ●

文藝時評大系

全73巻
別巻5

全巻完結!!

▼各巻定価(明治篇) 一八、九〇〇円(本体一八、〇〇〇円)
 (大正篇・昭和篇) 二二、〇〇〇円(本体二〇、〇〇〇円)
 ▼揃定価 一、六〇四、四〇〇円(本体一、五二八、〇〇〇円)
 ▼仕様 A5判・上製・クロス装・函入 ISBN978-4-8433-1673-3 C3391

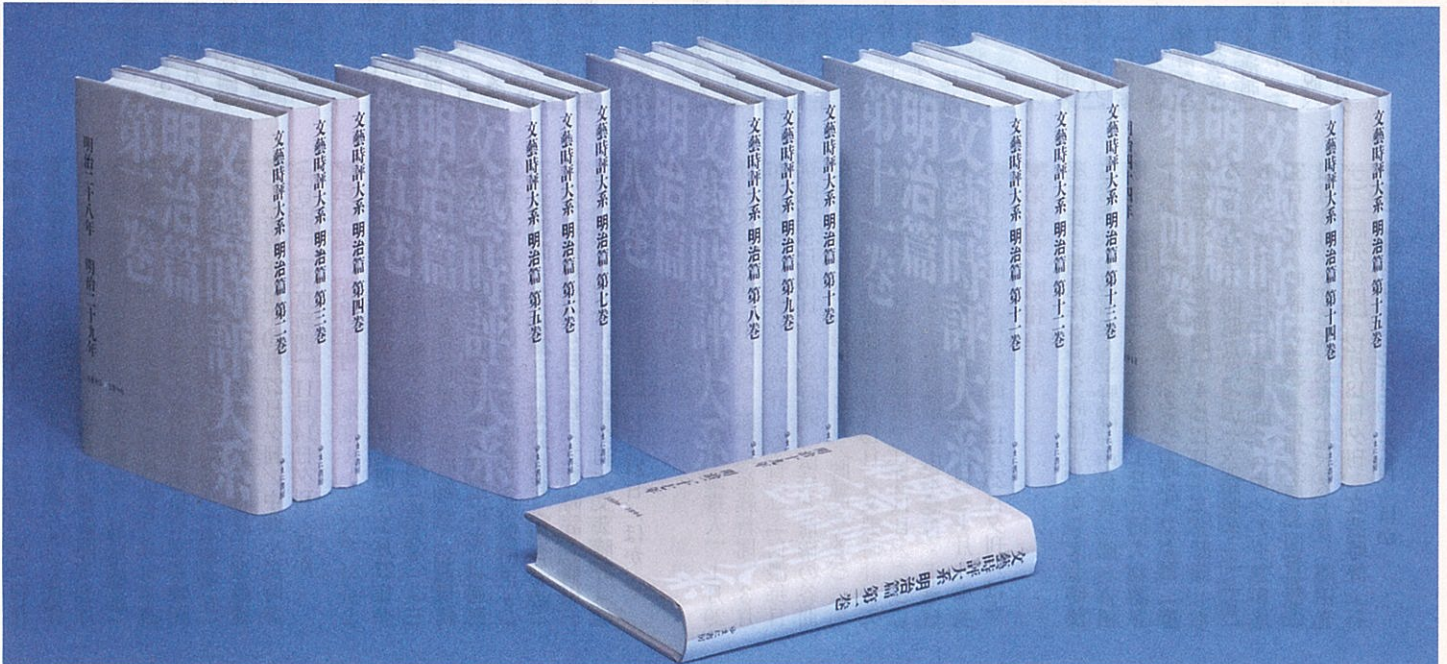
〔編者〕中島国彦
明治篇
 ●全15巻 ISBN978-4-8433-2062-4 2005.11刊
 ●別巻(索引) ISBN978-4-8433-1751-8 2006.05刊
 ●揃定価三〇二、四〇〇円(本体二八八、〇〇〇円)

〔編者〕宗像和重
大正篇
 ●全14巻 ISBN978-4-8433-2283-3 2006.10刊
 ●別巻(索引) ISBN978-4-8433-1752-5 2007.03刊
 ●揃定価三二五、〇〇〇円(本体三〇〇、〇〇〇円)

〔編者〕池内輝雄
昭和篇Ⅰ
 昭和2年～ 昭和20年
 ●全19巻 ISBN978-4-8433-2284-0 2007.10刊
 ●別巻(索引) ISBN978-4-8433-1753-2 2008.03刊
 ●揃定価四二〇、〇〇〇円(本体四〇〇、〇〇〇円)

〔編者〕曾根博義
昭和篇Ⅱ
 昭和21年～ 昭和33年
 ●全13巻 ISBN978-4-8433-2285-7 2008.10刊
 ●別巻(索引) ISBN978-4-8433-1754-9 2009.03刊
 ●揃定価二九四、〇〇〇円(本体二八〇、〇〇〇円)

〔編者〕曾根博義
昭和篇Ⅲ
 昭和34年～ 昭和45年
 ●全12巻 ISBN978-4-8433-2286-4 2009.10刊
 ●別巻(索引) ISBN978-4-8433-1755-6 2010.04刊
 ●揃定価二七三、〇〇〇円(本体二六〇、〇〇〇円)



〒101-0047
 東京都千代田区内神田2-7-6
 TEL.03(5296)0491
 FAX.03(5296)0493
<http://www.yumani.co.jp/>
 e-mail eigyou@yumani.co.jp

●おすすめめしたい方
 日本近代文学、文学史研究者、文学館、公共・大学図書館、関係研究機関など。

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491 / Fax.03(5296)0493		年 月 日	※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。	
ご注文書	文藝時評大系		取扱店	セット
	お名前			
ご住所	TEL ()			